



「Readings in Physiological Psychology Neurophysiology Sensory Processes」

Charles G. Gross & H. Philip Zeigler

リハビリテーション医学の分野で仕事をしている者にとって、患者の“心理”を把握しておく必要性は誰もが認めるところである。しかし、“心理的アプローチ”うんぬんという言葉をよくきくことがあるが、その言葉が空に消えてしまいそうなものは、やはり具体性に欠けているからではないか。臨床心理学の分野が立ちおけている日本の医療界の中で、その穴うめをしていくことも我々に課せられていることの1つではなからうか。

近年、Physiological Psychology の文献が増えている。これは、神経生理学の研究が進むにつれ、人間の心理、行動、知覚などを神経生理学的観点から解明しようとする研究が盛んになってきたからであろう。

日頃、中枢性疾患の患者に接していて、患者の心の動き、精神面などの異変を事実として感じている臨床者と

して、それらを理解するための具体的な手がかりを求めている者の一人だが、そのニーズを少しでも満たすべく最近数冊の文献を取寄せた中の一冊の概略を紹介しておきたい。

この本は Part I, II に分かれていて、Part I は Neurophysiological Foundations と題して、神経細胞の活動に関する研究法の論文が2題、Part II では、The Processing of Sensory Information と題して、

- a. Receptor Mechanisms に関する研究論文2題
- b. Sensory Coding に関する研究論文6題
- c. Central Control of Sensory Input に関する研究論文5題から構成されている。

(Harper & Row, 1969)

(有馬温泉病院 奈良 勲)

「自閉症 文明社会への動物行動学のアプローチ (Early Childhood Autism—An Ethological Approach—)」

E. A. Tinbergen/N. Tinbergen 著・田口恒夫訳編

題名にひかれて買った本であるが、硬いタイトルに反して、気楽に読める本である。著者についての紹介を、訳者のまえがきから引用させてもらおうと「……自閉症の本としてはきわめて異色の本である。著者は児童精神科医でも心理学者でもない。40年以上にわたって、トゲウオやカメヤラの行動の神秘を解明することに心血を注いできた生粋の動物行動学者とその夫人である。…そのティンバーゲン教授が1973年にノーベル生理学・医学賞を受賞している。しかも受賞の根拠は、本人に言わせれば主としてこの本を書いたためだという。」

この本の狙いは、動物行動学の分野で、高等動物における社会的な出会い（もちろん、非言語的なもの）の研究に用いる方法論をバックに現在の自閉症研究にメスを入れ、自閉症に関する仮説的モデルを提案し、治療についての助言をしながら、最終的には非言語的コミュニケーション全般の研究に対する一つの可能性を示すことであると思われる。やや自己宣伝的な感がないでもない

が、その背後には現在の自閉症への各種アプローチに対する焦燥感のようなものが感じられ、随所に顔を出す自閉症の精神病理学的研究方法論に対する批判も考えさせられる点が多い。動物行動学の方法論そのものを詳しく知りたい人には、不十分な内容であろうし、自閉症そのものを知るにはやや一面的な見方ではあるが、全く分野の異なる領域での方法論が、自閉症という具体的問題に、応用されていくサマが新鮮な感動をよび起してくれる。常日頃、分裂病に接してはいるが、なまじ、言語があるために行動観察が大難儀になってしまうことを痛感していたので、あらためて非言語的コミュニケーション活動のエソロジカルなアプローチへの関心をもたせてくれたともいえる。小児の分野、精神科の分野で働いている方々に一読をすすめたい本である。

(原著：1972年刊。和文版：新書館、1976年刊)

(山梨日下部病院 富岡 詔子)